パイプのけむり

團　伊玖磨

朝日新聞社

又 パイプのけむり

團 伊玖磨

朝日新聞社

團（だん） 伊玖磨（いくま）
大正13年4月7日東京生れ。昭和20年東京音楽学校（芸大）作曲科卒業。以後作曲ならびに自作の演奏に従事。昭和41年日本芸術院賞受賞。「パイプのけむり」「続パイプのけむり」で第19回読売文学賞（随筆・紀行）受賞。
作品　歌劇「夕鶴」「ききみみずきん」「楊貴妃」他，交響曲5曲他，歌曲，劇音楽等作品多し。
著書　「朝の国・夜の国」「不心得12楽章」「エスカルゴの歌」「パイプのけむり」「続パイプのけむり」「続々パイプのけむり」「かんぢぁせいしょん・たいむ」。

又・パイプのけむり

昭和44年9月10日　第1刷発行

定価　500円

著者　團　伊玖磨
発行者　朝日新聞社　大田信男
印刷所　明善印刷株式会社
発行所　東京　名古屋　大阪　北九州　朝日新聞社

Printed in Japan
© 1969 IKUMA DAN

又

パイプのけむり

もくじ

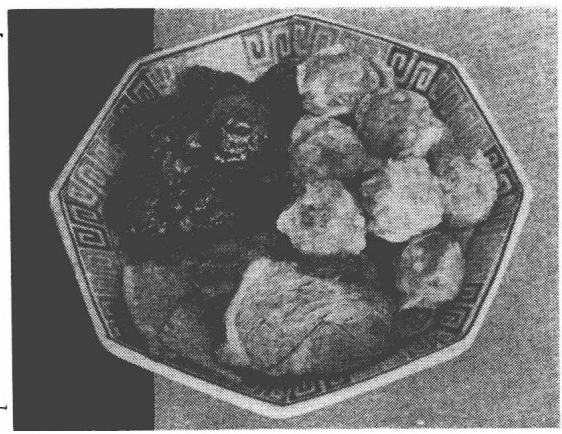
月たらず 5
営養 14
燐寸 20
三浦三崎 24
靴下 37
スパイ 49
狸 58
スピーチ 67
旅枕 72
ずどん 86
空中訪問 95
草野粥 100
鱭 104
小判草 115
フォーク 121
オツキサマチガイマース 135
がじゅまる 140
インク消し 149
南瓜 153
箸 162
LLのL 168
越南日記 172
柊 200

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ある午後 205
ポン 211
スリッパー 220
マッハ1・3 225
木耳 241
スキー 251
冬葵 261
蘆花の故地 266
電気包丁 277
変な帽子 286
四十肩 291
夏型人間 296
浅葱水仙 301
ハッピー・バースデイ 305
指の輪 310
あとがき 315

題字・岡島伴郎
写真・朝日新聞社

月たらず



43・1・26—2・2

暮のこと、月刊の雑誌社に勤めている友人が遊びに来た。

「何うだね、相変らずあっちへ行ったりこっちへ行ったり、大した事でもない事を大した事がって、勝手に忙しがっているんだろうね」

「忙しい、忙しい。雑誌の仕事は忙しいよ」

「忙しくなくて良いんだよ。忙しくない筈なのに、勝手に忙しがっているんだよ、君達は。時間の使い方が下手なために」

「確かにそういう面もあるな。雑誌の仕事は忙しいものだと自分達で決め込んでいて、その仕事に携わっている以上、忙しいのが当た

り前で、だから、忙しくなければ変なのだと心の中で思っていて、だから、忙しいのが本当だと思ってしまって、だから、忙しくしていると、本当に自分が生きているというような心算(つもり)になってしまうところがある」

「下らぬ思想だ。幼稚な思想だよ。そんな下らぬ生活哲学を抱いた人間どもが編集者として働いているものだから、見ろ！　貴君達の作っている雑誌はちっとも面白くない」

「面白くないって？　そうかな、面白くないかな」

「あゝ、詰まらないよ。どの頁を見たって面白くない。例えばこのグラビアを見てご覧。奥様方の中華料理と書いてあって、何色刷りか知らないが、けばけばしい天然色写真が出ている」

「天然色写真とは古風で怖れ入っちゃうな。カラー・グラビアと言って欲しいね」

「ま、兎に角、この写真一つにしても、実に詰まらない」

「そうかな、これは苦心して撮影したんだぜ」

「君達が苦心したかしないかは、読者に関係が無いんだよ。読者にとっては、面白くて、真実であることが大切なんだ」

「そりゃそうだが、このグラビアの何処(どこ)が不可無(いけな)いんだね」

「これは、ここに書いてあるように、家庭の奥様方、つまり主婦が作れる中華料理の写真を並べた訳だろう」

「そう。ちゃんと材料の値段や、作り方の手順も説明してある」

「それが可笑しいと思うんだ。この写真の皿を見ろ」
「皿？」
「そうさ、料理は兎も角として、皿が変だよ」
「何うして」
「この皿は、豪華な品だ。この中華風のスープの大鉢にしても、前菜用の大皿にしても、肉団子の載っている高坏にしても、この老酒用の徳利にしても、こんな物が普通の家庭に揃っているかしら」
「先ず、揃っている事は有り得ないだろうね」
「そこが可笑しいって言うんだよ。家庭用の料理欄なら、普通の家庭にある程度の皿類の上に料理を載せて紹介す可きだと思う。さも無いと、この材料の値段表を調べて、この材料を買って来て、この手順でこの中華料理を作った主婦は、自分の家の質素な皿の上に盛った手製の中華料理とこの天然色写真を見較べて、この写真の方が美味そうで、自分の作った方を美味くなさそうに思ってしまう。可哀そうじゃないか」
「成る程、そういう考え方もあるね、然し」
「まあ、この写真はほんの一例だ。それに、僕は考えるんだが、雑誌というものは、どれもこれも嘘っぱしばかり書いていて怪し繰りからぬ」
「嘘っぱしだ？」
「そうとも、ま、一杯お茶でも呑んでから説明しよう。あ、ところで、お目出とう。赤ち

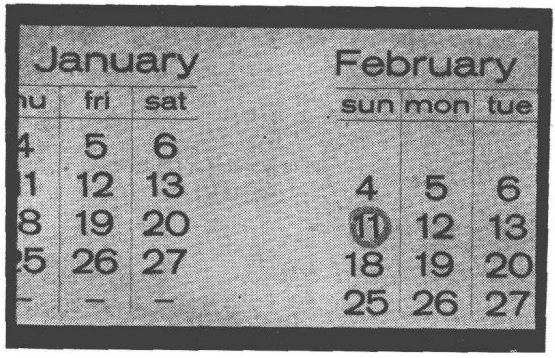
ゃんが生まれたってね」
「あゝ、有り難う。お陰でね、一週間前に、とうとう親爺になっちゃった」
「そりゃ良かったなあ、男の子？　女の子？」
「女だったよ、それが早産だった」
「ほう、それで、大丈夫だったの？」
「一寸心配しただけで、大した事は無かった。母子ともに健全だ。今は」
「小さく生んで大きく育てろとも言うから、構わないんだろう。これからの保育を完全にすれば」
「そうらしい。可愛いもんだ」
「本当に良かった。お目出とう」

お茶の用意をしようと思って立ち上がった僕は、気を変えて、ウヰスキーの水割りを作ると、父親になった友人と、元気で産院から退院したという母親と赤ちゃんの健康のために乾盃した。

「先刻ね、雑誌というものは嘘っぱしばかり書いていて怪しからぬ、と言い出したね」
「うん、そう思う」
「それは何ういう意味だね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「先ずね、この表紙を見ろ。これを変だと思わないかね貴君は、編集者として」
「これも苦心して描いて貰ったんだよ。正月号だから、一寸気張って、夏のうちから頼んで、羽子板と松飾りを抽象化したって訳だ」
「判った、判った。然しね、今は未だ正月じゃない。十二月だぜ」
「そうさ、十二月だから、一月号を売り出す。こりゃ当たり前だ」
「何故当たり前なんだろうか。さっぱり判らない」



「そういう事になっているから、そういう事になっている訳で、雑誌とはそういう物なんだよ」
「そこが判らないんだよ。世間がまだ師走だというのに、雑誌だけが勝手にお正月になった心算でいる。こりゃ全くナンセンスだ。そして、その嘘のお正月の表紙は夏に描かれた羽子板だと来ている。中の文章にしても、やれ明けまして何うとやら、新年の希望が何うとやら、今年こそは何うとやら、全部何ケ月前の嘘ばっかりだ。これが気になって遣り切れないんだよ。本当に」
「然しね、雑誌が先きの日付けの号を売るのは世界的な常識なんだよ」
「違う。そんなのは日本的常識で、必らずしも世界的常

識じゃない。外国の月刊誌は、だいたい、前の月の終りかその月にその月の号が出るか、せいぜい一週間か十日くらいしかちがわない。外国のウィークリーの雑誌は、店頭に出る頃の日付けが付いているのが普通だよ。発行されて、それが店頭に出る迄に、輸送その他で余程時間がかかるところならいざ知らず、日本のように、輸送に手間取らない国であってみれば、尚更、何故雑誌だけが矢鱈にずっと先きの日付けを付けなければならないかが僕にはさっぱり理解出来ない。戦争が終って暫らくした頃、日本中の雑誌が、まるで競争するように、だんだん先きの日付けを付け始めて、終いには、二ヶ月も先行した日付けを付した号が売られていた事があって、僕は、全く馬鹿々々しい事があるものだ、早ければ早い程良い訳でもあるまいに、雑誌の編集者などというものは、そそっかしいだけで、良い加減なものだと驚ろいていた。月刊誌がそんなだから、見ろ、週刊誌迄真似をして、十日も先きの日付けを付ける。タイムリーな記事が主である週刊誌がね、暮のうちに一月五日号などと記した号を売り出して、然も、内容は、大晦日の何とか歌合戦の予想なんてものを載せていて、これじゃ一体何が何やらさっぱり判りゃしない」

ずっと先きの日付けを付けた雑誌を作ってそれを売るのは、雑誌社の勝手かも知らないが、編集者がその先き走った日付けに内容を合わせようとする関係で、内容を提供するこちらが奇妙な目に遇い、困却する事が往々にして起こる。七月に八月号を店頭に並べようとするためには、五月か六月には原稿を揃えたいのが人情だろうし、そうなると、僕のよ

うな遅筆な人間に対しては、三月か四月に原稿の依頼が来なくては間に合わない。
「夏の八丈島の生活という文章をお書き願えませんか」
こんな事を春のうちに言われたところで、こちらは嘘吐きでは無いのだから、書ける訳がない。去年、若しくは過去に経験した夏の生活をあたかも今年であるかの如く書いてお茶を濁せば良いのだろうが、僕は正直だから、そんな事はしたくないし、売文業者ではないのだから、そんな事までをする必要もないし、意志もない。だから、そういう場合は、さっさと断ってしまう。
「今は春ですぜ。あたりは春だというのに、八丈島に夏が来た、などとまことしやかな嘘は書きたくないです。春の事なら書きますが」
編集者は、必らずと言って良い程、憤慨して、
「然し、この原稿は八月号に掲載したく思いますので、春の事では、季節外れになってしまって困るのです」
と言う。そこでこちらは、
「季節外れはあんたの方だ。あんたの方は勝手に八月でも、現在、こちらは、断固四月の終りです。ですから、今書くとすれば、春の事以外にありません。夏の事でしたら、何も焦る事はない、夏になってから書きましょう」
「いや、然し、それでは……」
「それではも何もありませんよ、僕は、あんたが考える程嘘吐きじゃないのです。だから、

原稿は、天下に浜の真砂の数程も蟠居している嘘吐きどもにお頼みなさい」
「？」

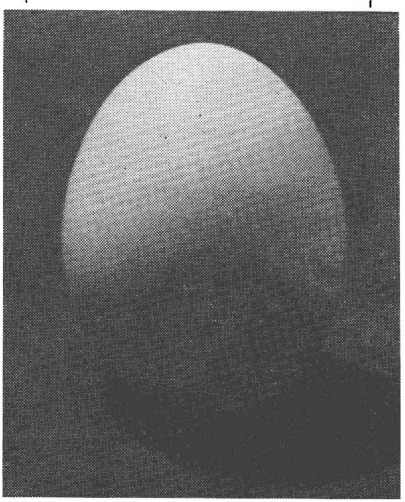
そして、編集者の間で、僕は評判の悪い人間となる。

「お正月号に載せますので、今年の抱負という一文をお願いします」
こんな事を晩秋の頃言われても、未だ今年から言えば、編集者の言う今年は来年なのだから、今年のうちに、来年の事を今年と書く程の嘘吐きで僕はない。
「まだ新らしい年になっていないのに、新年の抱負を書くのは無理ですよ。第一、交通事故も多いこの頃の事だから、正月迄僕が生きているか何うかも判らないのに、抱負など書いたら大変な事になる。若し、僕が暮のうちに死んでしまって、僕の抱負だけが来年巷のあちこちを彷徨う事になったら気味が悪いじゃないてすか」
「？」
「新年の抱負は、新年になってから決めます」

そして、又、僕は、編集者に悪印象を与えるのである。彼等はこう思う。何という非現実的な、物判りの悪い奴だろうか。然し、この場合、現実的でないのは編集者であって、物判りの悪いのも編集者であって、僕ではないのである。

「という訳でだな、君達雑誌の編集をする人間は、先きの事ばかり考えていて、万事上辷りだと思う」
「そう言われれば確かにそういうところもあるな」
「十二月になっていないのに十二月号を生む。これはまさに月足らずの思想だぜ」
僕は、言ってしまってから、しまった、と思った。彼の家には、月足らずの子が生まれたばかりである。
「そうか、月足らずか。成る程。僕が、何時も先きの月の事ばかり考えているものだから、赤ん坊まで、暮なのに一月だと勘違いして、もう外界へ出ようと考えて、早く生まれちゃった訳だな、成る程、こりゃ雑誌と一緒だな、胎教という奴だな、こりゃ、きっと」
僕は、事によれば、そんな事なのかも知れぬと考えたが、そうも言えぬし、それに、月足らずなどとの語を不用意に口走った事で狼狽していたので、いや、そんな事はないよ、いや、然し、ことによるとそんなところかな、などと意味のない事を口にしながら、まあ、もう一度赤ちゃんの健康のために乾盃しよう、とウヰスキーの瓶を取りに立ち上がった。

営養



43・2・9

生まれて来たから育ち、育ったから大人(おとな)になった。大人になったから働く。働くからには一人前の働きでは厭(いや)である。三人前も四人前も働きたい。凡そ一人の人間として生きて、一人分の働きしかしないのでは、当たり前の線の上を出ない。何時間働くから幾ら呉れというような、労働組合的なギヴ・アンド・テイクの思想を僕は持ちたくない。そういう簡単な思想に満足出来る人達がそういう簡単な思想を持つ事は自由だし、そういう簡単な思想に満足出来る人達がそういう簡単な思想のもとに暮らし、自分達がどんなに下を向

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com